

古典作家の学校 ヤン・コッット 石原達一訳

古典作家の学校

ヤン・コット

石原達三訳

せりか書房

訳者略歴

石原達二（いしはら・たつじ）

1932年生れ

1960年 東京大学文学部哲学科卒業

元岡山大学助教授

現住所 東京都八王子市東浅川町681

古典作家の学校

定価 850 円

1970年 6 月30日発行

著者 ヤン・コット

訳者 石原達二

発行者 菅原 敏

発行所 株式会社せりか書房

東京都文京区後楽 2・20・15内野ビル 電話813：8566～7 振替 東京143601

本文印刷 株式会社厚徳社

製本 神田錦町橋本製本

装幀 平野甲賀

1970 ©

古典作家の学校 目次

- ドイツ語版のまえがき・・・9
- 小説の誕生　または　ダニエル・デフォー論・・・13
- イギリス商人・・・15
- 孤島の資本主義・・・34
- ロビンソンとフライデイ・・・55
- ガリヴァ旅行記・・・75
- 本源的蓄積時代のパンフレット・・・77
- 哲学的旅行記・・・97
- 善良な蛮人と市民・・・115
- マノン・レスコーとその仲間たち・・・137
- 第三身分の趣味の擁護者・・・159
- サントロブルーヴとの休暇・・・193
- 危険なデイケンズ・・・213

歴史の学校・・・ 231

二つの判断・・・ 233

歴史的衣裳・・・ 238

プチ・ブルジョア または 永遠の人権の擁護・・・ 242

ブルジョアジー または 秩序の救済・・・ 246

指導者・・・ 251

軽蔑と熱狂・・・ 254

参考文献・・・ 257

訳者あとがき・・・ 259

人名索引

古典作家の学校

わが妻に捧ぐ

理解に困難なのは、ギリシヤ芸術や叙事詩が一定の社会的発展形態に結びついていて、あるところにあるのではない。困難なのは、われわれにとってそれがなにも芸術の楽しみを与え、ある点では規範、及び難い模範として通用しさえするということなのだ。

カール・マルクス

ドイツ語版のまえがき

カール・マルクスがすでに詳しく取扱った、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』から、マルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』に至るまで、西欧における文化発展の本質に関する本書の研究の哲学的射程は広がっている。イデオロギーの芸術的表現様式としての文学、また社会階級の現時的で、実効ある志向の表現様式としての文学、それがポーランドの文化歴史学者ヤン・コット教授の多面的、弁証法的な観察方法による研究対象である。

著者は一九一四年十月十七日ワルシャワで生まれ、法律学と哲学とを学び、哲学のマグステルとドクトルの学位を得た。祖国の被占領下時代、かれは国民軍の列に加わり戦い、戦後はポーランド労働党（PPR）、後に統一ポーランド労働党（PZPR）の党員となった。

ポーランドの解放以後、ヤン・コット教授はブロッラフ大学でポーランド文学に関する講義

を行ない、またその後、たびたび外国を訪問した。パリ、ロンドン、ローマ、ベルリン、モスクワ、コペンハーゲン、ソフィアなどに滞在している。

一九五一年には学術上の国家褒章二等を得た。

かれの公刊の著作には『二重世界』（一九三六）『神話とリアリズム』（一九四六）、『単純』（一九四六）『プルスの人形論』（一九四八）『古典作家の学校』（一九四九）『新しきタルチュフ』（一九五〇）、『われらの愛する詩』（一九五一）などがある。その他、いくつかの古典作品のポーランド語への翻訳があり、そのなかには『ガリヴァ旅行記』や『ロビンソン・クルーソー』なども含まれている。

『古典作家の学校』では、その時々を受けた過去の文化的遺産と、新時代の文学の新たな社会的 content との相互連関の分析が問題にされている。一八世紀および一九世紀の文学史からのいくつかの典型例、デフォーからスウィフト、プレヴォ、デイドロを経て、スタンダール、ディケンズ、フロベールなどを通して、著者はいかに人間というものが、自ら個有の歴史を創りながらも、同時につねに所与の状況や伝統に結びつけられているかということを明らかにする。上部構造は階級の存在条件から生じ、「歴史的衣裳」を着けていても前進的な力となる。そしてその歴史的衣裳の下には、すでに新しい社会秩序のモデルが隠されているのである。この著作全体を通じて著者は、「社会的存在が意識を規定する」という公式のあまりにも誤解されている通俗的解釈を批判的に討究している。誤解の点は、通俗的解釈では社会的存在という言葉

葉で個人の物質的利害が、そして意識という言葉で、その内面生活が考えられている、というところにある。

しかしながらマルクスの包括的な説明によれば、ヤン・コットが定式化しているように、「全人間性は社会的人間史の創造物」なのである。かれが強調するように、「人間性の創造物」のなかに、たんに「生産過程の反映」を見るところというように限定することはできないのだ。マルクスは「階級分化のような歴史における動因」を発見したのみならず、同時に文化変動に関する唯物弁証法的理論を最初に組織したのである。

このように、新しい内容を盛りこみつつも、伝統的なテーマや形式を受けついでいるという文化の発展過程における絶えざる変化の様相を指摘することが、この著作『古典作家の学校』の課題のひとつである。マルクスが『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』において、歴史の一劃期をそのすべての相互関係の光の下に叙述してみせた、あの情熱と同じ力で、ヤン・コットは古典文学の優れた諸作品の例によって、社会の発展法則を明らかにしている。そこからわれわれは「社会階級の動向や文化的、政治的、ならびに経済的な諸変動の客観的内容」を理解しようようになるのである。

ロビンソン・クルソーは「人間の自然との闘いのシンボル」になる。かれは自分の必要を満たすために、単純な商品生産から分業を経て、資本主義に至るまでの生産の発展を経験する。「ロビンソンはたんなるイギリスの市民ではなくなり、全人類の伝説的英雄になる。」手なず

けられた蛮人、フライデイも資本主義の積極的英雄（主役）となる。『ガリヴァ旅行記』では、著者はレジュメに次のように述べている。「長い間不幸に慣れてしまった国民は、次第に自由を理解する可能性を失なってしまう。」デイドロについてヤン・コットは、「かれこそ哲学が科学および社会的経験の一般理論にほかならぬことを理解した最初の人である」こと、そして「哲学、科学、芸術を人間の活動性として把握し、無神論者であった」ことを指摘している。デイケンズにおいては、憎んだり、愛したりしつつ、そして「世界と人間の本性に揺ぎない信頼をもっていた」当時の偉大なリアリステイックなクロニストを見ることが出来る。

「古典作家の学校」は文化にたずさわるすべての者のハンドブックである。というのも、ここにはマルクス主義美学の根本問題が実践的具体例において説明されているからである。本書は創造的文芸評論へのひとつの大きな貢献であり、またそれ自身、討論の一層の深化を促進するものである。

(ドイツ語版出版社)

小説の誕生

または

ダニエル・デフォー論

